

## 再び朝鮮語のリエゾンについて

菅野裕臣

筆者はかねてより朝鮮語の音韻に関する分野でリエゾンと筆者が呼ぶ現象に言及していたが（菅野裕臣(1965), 菅野裕臣(2006), 菅野裕臣(2007), 菅野裕臣(1988, 1991)), この度辻野裕紀(2014)を読むに及んで再びこの問題をも含めて考え直してみようという気になった。

辻野裕紀(2014:30)は「밭이랑は、意味を考慮しなければ, [반니랑], [바디랑], [바치랑] という3通りの発音がありうる。」と書いているが、実は [바치랑] はほかに [바시랑] という発音もあることを落としている。さらについてに言うならば, [바치랑] は [반치랑] もあり得るのである。筆者は辻野裕紀氏の論文を検討しようとも思ったが、音韻論の考え方について筆者と辻野裕紀氏の考えに大きく隔たりがあるので、筆者は自己の考えを推し進めることにする。

なお筆者のこの論文ではハングルを音素記号として用いる（音素記号の表示//は省略する）。ハングルㅇは /ŋ/ を表す。「初声」（音節の頭）, 「終声」（音節末）という伝統的な術語を用い, 「初声」としての「平音（ㄱ, ㅋ, ㆁ, ㆁ, ㆁ）」, 「激音（ㄷ, ㅌ, ㅍ, ㅍ, ㅍ）」, 「濃音（ㅂ, ㅃ, ㅆ, ㅆ, ㅆ）」, ㅇ [初声のみ] 及び鼻音（ㄴ, ㄴ [以上初声と終声], ㅇ [終声のみ]), 流音（ㄹ [初声と終声]) 及び「口音（ㄱ, ㅋ, ㆁ）[終声のみ]」を区別する。「口音（ㄱ, ㅋ, ㆁ）」は「平声（ㄱ, ㅋ, ㆁ）」と同じ音素である。「歯音」と記した子音はㄷ, ㅌを指す。ハングルの [ ] で囲んだものも筆者による音素と理解してよろしい。{ } で囲まれたハングルは正書法に基づく綴りである。

(a) まず現代朝鮮語の音韻論において音素の配列に関する規則を列挙する<sup>1</sup>。

1. ㄱ, ㅋ, ㆁ; ㄴ, ㄴ, ㅇ; ㅇだけが終声の位置に現れ得る。ㅂ, ㅃ, ㅆ, ㅆ, ㅆ, ㅆ, ㅆ, ㅆ, ㅆ, ㅆ, ㅆ<sup>補1</sup>は初声の位置にのみ現れる。
2. 終声の位置では平音ㄱ, ㅋ, ㆁ; 濃音ㅂ, ㅃ, ㅆ; 激音ㅌ, ㅍ, ㅍがそれぞれ中和して平音が現れる（口音ㄱ, ㅋ, ㆁと平音ㄱ, ㅋ, ㆁは同一音素である<sup>2</sup>）。
3. ㅇは終声にしか現れない<sup>3</sup>。
4. 口音ㄱ, ㅋ, ㆁの後では平音ㄱ, ㅋ, ㆁ, ㅆ, ㅆと濃音ㅂ, ㅃ, ㅆ, ㅆ, ㅆ, ㅆ, ㅆ, ㅆ, ㅆ, ㅆ, ㅆ<sup>補1</sup>だけが現れる。
5. 鼻音ㄴ, ㄴの前では口音ㄱ, ㅋ, ㆁと鼻音ㄴ, ㄴ, ㅇが中和し, 鼻音ㄴ, ㄴ, ㅇしか現れない。
6. 終声ㄴと初声ㅇ及び終声ㅇと初声ㄴは決して隣り合うことがない。すなわち初声ㄴの前では終声ㄴと終声ㅇは中和し, 終声ㄴだけが現れる。また初声ㅇの前では終声ㄴと終声ㅇは中和し, 終声ㅇだけが現れる。

7. ㅇは形態素の頭、母音及び鼻音、流音の後にしか現れない。外来語及び漢字語語幹の間でもㅇが現れ得る。
8. ㅁは外来語でのみ語頭に現れ得る。固有語と漢字語でㅁを頭音とするものはない。すなわち固有語と漢字語の頭ではㄴとㅁは中和し、ㄴだけが現れる。
9. 固有語と漢字語の語頭では i, y の前にㄴが現れることはない。すなわち i, y 及び ni, ny はそれぞれ中和し、i, y が現れる。ただし ni, ny は少数の語彙（固有語）にあらわれる。
10. 漢字語においては語頭及び口音ㅍ, ㅑ; 鼻音ㄹ, ㄴ, ㅇ（終声）の後では初声ㄴとㅁは中和し、初声ㄴだけが現れる。[正書法では口音ㅍ, ㅑ; 鼻音ㄹ, ㄴ, ㅇ（終声）の後では初声ㄴとㅁとが書き分けられる.]
11. なお現代朝鮮語で終声において朝鮮人は[ㄹ], [ㄷ], [ㄷ]のような2子音の発音が可能である<sup>4</sup>。
12. 現代朝鮮語で「母音+濃音」は次の音への置き換えが可能である。ㅁ [ㅍ+ㅁ], [ㅑ+ㅁ]; ㅌ [ㅑ+ㅌ]; ㅍ [ㅑ+ㅍ<sup>5</sup>]; ㅍ [ㅑ+ㅍ]; ㅑ [ㅑ+ㅑ], [ㅑ+ㅑ]<sup>6</sup>。
13. 現代朝鮮語で「母音+激音」は次の音への置き換えが可能である。ㅍ [ㅍ+ㅍ], [ㅑ+ㅍ]; ㅌ [ㅑ+ㅌ]; ㅑ [ㅑ+ㅑ]; ㅑ [ㅑ+ㅑ], [ㅑ+ㅑ]<sup>6</sup>。
14. 現代朝鮮語の話し言葉では次のような置き換えが恒常的である。ㄴ+ㄹ, ㅍ, ㅍ, ㅍ→ㄹ+ㄹ, ㅍ, ㅍ, ㅍ; ㄴ+ㅑ, ㅑ, ㅑ→ㅇ+ㅑ, ㅑ, ㅑ; ㄹ+ㅑ, ㅑ, ㅑ→ㅇ+ㅑ, ㅑ, ㅑ; ㅍ+ㅑ, ㅑ→(ㅑ)+ㅑ, ㅑ<sup>7</sup>。

(b) 以上のことを形態素の結合に関して次のように再整理してみる。[ ]内は別表の中の記号などを参照せよ。

- a. 口音の後での平音の濃音化（口音+平音→口音+濃音）ㅍ, ㅑ, ㅑ+ㅍ, ㅑ, ㅑ, ㅑ, ㅑ→ㅍ, ㅑ, ㅑ+ㅍ, ㅑ, ㅑ, ㅑ, ㅑ (順行同化) [別表の a 参照]
- b. 口音の鼻音化（口音+鼻音→鼻音+鼻音）ㅍ, ㅑ, ㅑ+ㄹ, ㄴ→ㄹ, ㄴ, ㅇ+ㄹ, ㄴ (逆行同化) [別表の b 参照]
- c. 初声ㅁのㄴ化（流音の鼻音化）ㄴ+ㅁ→ㄴ+ㄴ（順行同化）[別表のゴチックのㄴ<sup>1</sup>（1か所；名詞類+ㅁ欄）参照]
- d. 初声ㄴのㅁ化（鼻音の流音化）ㅁ+ㄴ→ㅁ+ㅁ（順行同化）[別表のゴチックのㅁ（名詞類+ㄴ欄及び用言類+ㄴ欄）参照]
- e. アンシェヌマン enchaînement（終声の初声化）（母音+終声+母音→母音+初声+母音）[V+p, t, k, m, n, l+ V] → [V+b, d, g, m, n, r + V]（順行同化）[別表の名詞類 e+母欄参照]
- f. 終声と i, y の間への/ㄴ/の挿入（終声+i, y→終声+ni, ny）（これはしばしば 1. 口音の鼻音化, 2. 初声ㄴのㅁ化を惹き起こす）ㅍ, ㅑ, ㅇ+ i, y → ㅍ, ㅑ, ㅇ+ ni, ny; ㅍ, ㅑ, ㅑ+i, y → ㅍ, ㅑ, ㅇ+ ni, ny; ㅁ+ i, y → ㅁ+li, ly（同化にあ



らず. ㄷ 音の挿入) [別表の名詞類 f+i, y 欄参照]

- g. ㅎとの結合における口音の激音化 [ㄹ, ㄷ, ㄱ + ㅎ → ㅈ, ㅊ, ㅋ]  
[別表の名詞類 g+ㅎ欄参照]
- h. 鼻音及び流音の後での平音の (鼻音, 流音+平音→鼻音, 流音+濃音)  
ㄱ, ㄴ, ㅇ, ㄷ + ㄹ, ㄷ, ㅅ, ㄴ, ㄱ → ㄱ, ㄴ, ㅇ, ㄷ + ㅁ, ㅂ, ㅅ, ㅈ, ㅊ, ㅋ (同化にあらず)  
[正書法には反映されず]. [別表の名詞類ゴチックㄹ, ㄷ, ㅅ, ㄴ, ㄱの部分参照]
- i. 終声ㄴのㄷ化 (鼻音の流音化) [ㄴ + ㄷ → ㄷ + ㄷ] (逆行同化) [別表の名詞類 +ㄴの欄の下から2段目のゴチックの -ㄷ<sup>2</sup> (1か所) 参照]
- j. 子音の形態音素論的交替 [子音語幹 (母音の前) ~ 子音語幹 (子音の前) の交替] ㅈ ~ ㄱ {ㅈ}, ㄱ + ㅁ ~ ㄱ {ㅁ}, ㄷ + ㄹ ~ ㄹ {ㄹ}, ㄷ + ㅈ ~ ㄷ {ㅈ}, ㄷ + ㄱ ~ ㄱ {ㅈ}, ㅊ ~ ㄷ {ㅊ}, ㄴ ~ ㄷ {ㄴ}, ㅁ ~ ㄷ {ㅁ}, ㅅ ~ ㄷ {ㅅ}, ㅈ ~ ㄷ {ㅈ}, ㄴ + ㅅ ~ ㄴ {ㅅ}, ㄱ ~ ㄱ [ㄱ], ㅋ ~ ㄱ {ㅋ}, ㄱ + ㅁ ~ ㄱ {ㅁ}, ㄷ + ㄹ ~ ㄷ {ㄹ}, ㄷ + ㅊ ~ ㄷ {ㅊ} [別表の用言類の発音, +接尾辞; 名詞類の発音と助詞の部分参照]
- k. 歯音の口蓋化 [ㄷ + i, y → ㅈ + i, y {ㄷㅈ, ㅈㅈ}, ㅊ + i, y → ㅊ + i, y {ㅊㅈ, ㅈㅈ}, ㅈㅈ, ㅈㅈ, ㅈㅈ, ㅈㅈ} [別表の用言類の+接尾辞; 名詞類の+助詞の部分参照]
- l. 流音+平音→流音+濃音 [ㄷ + ㄷ, ㅅ, ㄴ → ㄷ + ㅂ, ㅅ, ㅈ, ㅊ] (漢字語)  
[別表の名詞類の下から2段目の -ㅁ, -ㅂ, -ㅅ, -ㅈ, -ㅊ参照]
- m. なお-ㄷ用言連体形+平音→-ㄷ+濃音 [ㄷ + ㄷ, ㄷ, ㅅ, ㄴ, ㄱ → ㄷ + ㅁ, ㅂ, ㅅ, ㅈ, ㅊ, ㅋ] もある. [別表の名詞類の下から2段目の -ㅁ, -ㅂ, -ㅅ, -ㅈ, -ㅊ部分参照]
- n. 鼻音, 流音+平音→鼻音, 流音+濃音 [ㄱ, ㄴ, ㄷ + ㄷ, ㅅ, ㄴ → ㄱ, ㄴ, ㄷ + ㅂ, ㅅ, ㅈ, ㅊ] [別表の用言類の n 参照]
- o. 激音化: 母音, ㄴ, ㄷ + ㄷ, ㅅ, ㄱ → 母音, ㄴ, ㄷ + ㅈ, ㅊ, ㅋ [別表の用言類の o 及び用言類のㅎ-系列参照]

(c) 以上の (a), (b) を別表にまとめてみる.

以下に別表の注記を記す.

1. **用言類**とは動詞，形容詞，存在詞（있다, 없다, 계시다），繫辞(이다, 아니다)を言う。
2. **名詞類**とは体言（名詞，代名詞，数詞），連体詞，副詞，接統詞，接頭辞，体言接尾辞，体言助詞及び用言語幹等を言う。
3. 名詞類の**助詞（＋母）**とは最も多く用いられる母音で始まる体言助詞及び繫辞-이다である。これは多く標準語（書き言葉）の形である。**自立要素**とは助

用言類										名詞		
發 音	文 字	+語尾					+接尾辭			發 音		
		+口音				+ㄷ	+母音	+ i, y	+ hi, hy			
		ㄷ	ㅌ	ㄴ	ㄱ							
ㅂ- / ㅍ-*	ㅂ-	-ㅂ	-ㅌ	-ㄴ	-ㄱ	-ㄴ*	-ㅂ		-ㅍ	ㅂ-		
	ㅍ-						-ㅍ		—	/		
	ㅃ-						ㅂ-ㅃ		—	ㅍ-*		
	ㅍㅍ-						ㅂ-ㅂ		ㅂ-ㅍ	ㅂ-		
	ㅍㅍㅍ-						ㅂ-ㅍ	—	—	—		
ㄷ- / ㄴ-*	ㄷ-	a	a	-ㅃ a	a	-ㄴ*	-ㄷ	-ㅌ	-ㅍ	—		
	ㅌ-						-ㅌ	-ㅍ	—	ㄷ- / ㄴ-*		
	ㅌㅌ-						-ㅌ		-ㅍ			
	ㅌㅌㅌ-						-ㅍ	—	—			
	ㅌㅌㅌㅌ-						-ㅌ		—			
	ㅌㅌㅌㅌㅌ-						-母音		—			
	ㅌㅌㅌㅌㅌㅌ-	-ㅌ	-ㅌ		-ㅌ		—					
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
ㄱ-/ ㅇ-*	ㄱ-	-ㅂ	-ㅌ	-ㅃ a	-ㄱ	-ㄴ*	-ㄱ		-ㅌ	ㄱ- / ㅇ-*		
	ㄷ-				ㅂ-ㄱ		ㅂ-ㄱ		ㅂ-ㅌ			
	ㄷㅌ-				-ㄱ		-ㄱ		—			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
ㄴ-	ㄴ-	-ㅂ	-ㅌ	-ㅃ n	n	-ㄴ	-ㄴ	—	—	ㄴ-/ ㄷ-*		
	ㅌ-						ㄴ-ㅌ	—	ㄴ-ㅍ		—	
ㄷ-	ㅌ-					n	n	-ㅃ	ㅂ-ㅂ		ㅂ-ㅍ	—
	ㅌㅌ-								ㅂ-ㅌ	ㅂ-ㅍ	—	
ㅍ-	ㅌㅌ-							-ㅍ	—	—	ㅍ-	
	ㅌㅌㅌ-					-ㄴ	—	—				
ㄴ-	ㅌㅌㅌ-	-ㅌ	-ㅌ		-ㅌ	-ㄷ	-ㅂ		—	—		
ㅂ-	ㅌㅌㅌ-	o	o		o				—			
ㄷ-/ ㅌ-*	ㅂ-	-ㅂ	-ㅌ	- ㅌ*	-ㄱ	-ㄴ*	-ㅂ		—	ㅂ-		
ㅇ-	—	—	—	—	—	—			—	ㅇ-		
母音		-ㅂ	-ㅌ	-ㅌ	-ㄱ	-ㄴ	母音	—	—	母		

## 名詞類

[illegible]



詞（＋母）を除くほとんどのものを言う。自立要素（＋母）は助詞（＋母）と同じだが、多くソウルの話し言葉で用いられる形である。したがって助詞（＋母）と自立要素（＋母）とでは正書法では同じでも発音は異なり得る。例：말이：標準語 [바치]，ソウル話し言葉 [바시]。

4. 発音は基本的にソウルのものである。「文字」欄のハングルは正書法のもの、それ以外のハングルは音素記号の代用とする。
5. 具体的な単語について次の点に注意されたい。用言類のㄹ-は없다のみ。ㄴ-は있다のみ。動詞類のㄹ-は있다のみ。ㄴ-は있다のみ。名詞類のㄹ-は여덟のみ。名詞類のㄴ-は말のみ (말이[마지])。名詞類のㅎ-は히읇のみ。名詞類のㄹ-はㄴ-用言の体言形-로。名詞類のㄴ-, -스-, ㄴ-などは話し言葉でも「助詞＋母」の形を保つものがある。앞에[아페]，낮에[나제]，밖에[바게]。
6. 記号「—」は存在しないと思われるものである。
7. 「○-」は終声を，「-○」は初声を示す。「-」は音節の境界である。
8. 「\*」どうして結合することを示す（口音の鼻音化，鼻音ㄴの流音化）。
9. 名詞類の「e＋母」は「名詞＋母音で始まる単語の結合（アンシエヌマン）」の場合である。他の終声の場合にはこのような区別はない。ついでながら「g＋ㅎ」は口蓋化を起こすことがない。またアンシエヌマンに際して歯音の口蓋化は起きない。
10. 黄色い色をつけたものは漢字語でのみ起こり得る。i は唯一漢字語にのみ特有な規則で、「漢字語語幹（漢字2字）内」でのみ起こる。c は「漢字語語幹＋漢字語接尾辞」の間でのみ生ずる。d はその他の場合、すなわち「漢字語語幹＋漢字語語幹の間」，「漢字語語幹＋漢字語接尾辞の間」，「漢字語接頭辞＋漢字語語幹の間」で起こる。i と c の違いに注意。なお l も漢字語にのみ存する。n は「漢字語語幹（漢字2字）内」で生じ，「漢字語語幹＋漢字語接尾辞の間」では起きることも起きないこともあり，「漢字語接頭辞＋漢字語語幹の間」では絶対に起きない。なお-ㄴで始まる外来語がㄴ-の後ろに来るときは，すなわちいわばアンシエヌマンの位置では c のみが現れる。例：책상 위에 있는 라디오[인느-나디오]。
11. m（非漢字語）の濃音化は通常で話される「用言連用形＋体言」にあられるが，同じ構造の合成語では必ず現れる。例：날＋짐승→날짐승[날짐승]。ただし갈 사람[갈 사람]（非常にゆっくりした発音），[갈싸람]（普通の速度の発音）。
12. 名詞類の「h＋i, y」欄は現代朝鮮語では自立語と自立語の間にアンシエヌマンの位置に現れ得，アンシエヌマンとは異なり，音（-ㄴ/-ㄴ）が添加されるから，この現象はリエゾンと呼び得る。本来は単語間で行われたリエゾンは合成語の形態素間（語幹＋語幹，接頭辞＋語幹，語幹＋接尾辞）に固定され

ることとなった。そしてリエゾンは「漢字語語幹どうし」及び「漢字語接頭辞＋漢字語語幹」、「漢字語語幹＋漢字語接尾辞」にも拡大される。

(d) さらに (b) のようなさまざまな言語的作用 (同化その他) によって朝鮮語ではさまざまな位置における音素の交替 (形態音素論的交替) が成立したのだが、それを分類すると次のとおりである ([ ] は (b) の符号を示す)。

I. 交替を成さないもの (ㅇ-を除いて終声と初声との交替、単なる音声の交替) :  
用言類ㅁ-, ㅂ-, ㅅ-, ㄹ-, ㄴ-, ㅁ-, ㅂ-, ㅅ-, ㄹ-, ㄴ-, ㅇ-. [e]  
(アンシエヌマン) もここに属する。

II. 交替を成すもの :

1) 子音 (終声) と母音の子音 (初声あるいは終声＋初声) の交替 (交替の様相は常に一定であるが、あらかじめ歴史的に決定されたもので、全面的に言語学的に決定されたものとは言えない)

[j] [用言類及び名詞類]. これに類するものとしてㄷ (終声) とㅅ (初声) の交替がある [名詞類. 話し言葉]

[k] ㄷ (終声) とㅅ (初声), ㅇ (終声) とㄴ (初声) の交替 [用言類及び名詞類で] (交替の様相は一定であるが、交替は歴史的に形成されたもの)

2) 子音と子音の交替 (現代朝鮮語自体の内的な言語的な規則によって決定されたもの)

[a] ㄹ (平音) とㄴ (濃音) の交替 (初声)

[b] ㄹ (平音) とㄴ (濃音) の交替 (終声)

[c] ㅇとㄴの交替 (初声) [漢字語語幹の後の漢字語接尾辞, ㄴの後の外来語]

[d] ㅇとㄴの交替 (初声) [漢字語語幹内部]

[i] ㅇとㄴの交替 (初声) [漢字語語幹内部]

[l] ㄹ (平音) とㄴ (濃音) の交替 (初声. 流音の後) [漢字語語幹内部, 漢字語語幹の後の漢字語接尾辞]

[m] ㄹ (平音) とㄴ (濃音) の交替 (初声. ㅇ-連体形の後) [固有語, 漢字語を問わず]

[g] ㄹ (平音) とㄴ (濃音) の交替 (初声. 終声 (平音) +ㅎによる) [名詞類で] (この場合口蓋化は行われない)

3) 子音と子音の交替 (現代朝鮮語自体の内的な言語的な規則によって決定されたものとはいえないもの)

[h] ㄹ (平音) とㄴ (濃音) の交替 (初声. 鼻音と流音の後) [名詞類で] (歴史的には音素 /ㄴ/ の挿入による. 正書法では特別の表記なし)

[n] ㄹ (平音) とㄴ (濃音) の交替 (初声. 鼻音と流音の後) [用言類で] (交替の様相は一定であるが、交替は歴史的に形成されたもの. 正書法では特別の表記なし)

[o] ㄹ (平音) とㄴ (濃音) の交替 (初声. ㅎ＋初声 (平音) による) [用言類で] (交替の



様相は一定であるが、交替は歴史的に形成されたもの)

[f] 終声+i,y と終声(鼻音)+ni,nyの交替[名詞類で](歴史的に形成されたもの、正書法では特別の表記なし)

(e) 上記の如き交替を現代朝鮮語の形態素との関係において整理してみると、第1表と第2表の如くとなる。これらによってかなりいろいろなことが分かる。

1. 用言類と名詞類の「助詞」までを一区切りとし[i], さらに「母音」, 「ㅎ」, 「iy」の3つをひとくくりとすることができる[iii]. 用言類と名詞類の「子音」は比較的似た働きをするが、なおも微妙な違いがある[ii].
2. (i) のうち /ㄷ/ 終声(名詞)については上記(d) II 1) [j] 参照。なおも次の例参照: 발은 [바튼] (標準語), [바튼] (話し言葉); 발 위 [바뒤] (アンシエヌマン). 自立的要素の母音と結合する時(アンシエヌマン) 終声が異なる現れをすることに注意。
3. 「口蓋化」は[i]にしか現れない。「ㅎ」欄(g)の激音化が口蓋化を伴うことはない。
4. dのㄷ化は固有語、漢字語ともに現れる現象であるが、iは漢字語にのみ現れる現象として特殊である。iにおけるㄷの機能負担量は小さいものと思われる。(第1表) 参照。
5. [iii]におけるアンシエヌマンとリエゾンは一見相補う関係にあるように見えるが、リエゾンはアンシエヌマンと平行的に用いられることがしばしばである。

(第1表)

	語幹内		語幹+語幹		語幹+接尾辞		接頭辞+語幹	
	固有語	漢字語	固有語	漢字語	固有語	漢字語	固有語	漢字語
cㄷ化	—	(◎) <sup>1</sup>	—	—	—	◎ <sup>1</sup>	—	—
dㄷ化	○	○ <sup>2</sup>	○	○	—	—	—	—
iㄷ化	—	◎	—	—	—	—	—	—
l濃音化	—	◎	—	—	—	◎ <sup>4</sup>	—	—
アンシエヌマン	—	—	○	○	○	○	○	○
リエゾン	—	(○) <sup>3</sup>	○	○	○	○	○	○

◎は漢字語にのみ認められる交替である。

(○), (◎) は用例の少ないもの。

- 1 例えば {선릉}[선릉] (宣陵 [陵の名]) は語幹内のように見えるが、「語幹+接尾辞」ともとれる。他方 {선}[선]+{능}[능] (陵 [名詞]) (「語幹+語幹」に準ずるもの) と取れないこともない。



- <sup>2</sup> 例えば {승낙}[승낙](承諾)は現代語においては {승+락} と解釈する可能性もある. {수락}[수락](受諾), {허락}[허락](許諾), {쾌락}[쾌락](快諾)参照.
- <sup>3</sup> 例えば {작렬}[장렬](炸裂)は現代語では{작+열} (リエゾン) と解釈する可能性もある. {파열}[파열](破裂), {분열}[부녘], [분녘](分裂)参照. また {법률}[법률](法律)は現代語では{법+율} (リエゾン) と解釈する可能性もある. {규율}[규율](規律), {선률}[서늘], [선늘](旋律)参照. なお例えば{농약}[농약](農薬) は特にゆっくり発音されると [농낙] ともなることがある. いわば 2 字から成る漢字語語幹内の漢字形態素の境界で例えば {알약}[알약](一藥) のようなリエゾンが生じたと言うべきである.
- <sup>4</sup> 例えば {시찰단}[시찰단]あるいは[시찰단] (視察団) .

(第2表)

(d) の 番号		用言類					子音類										
		語 幹	語尾			接尾		語 幹	助詞		自立的要素						
			母 音	子音		i y	hi hy		母音		子音			母 音	ㅇ	i y	
				口	鼻				V	i	口	鼻	流				
I			○						○	○							
	e													○			
II 1)	j		○						○	○							
	k					蓋	蓋			蓋							
II 2)	a			濃							濃						
	b 鼻							鼻									
	c												L				
	d				己							ㄷ					
	i							ㄷ									
	l										濃						
	m										濃						
	g															激	
II 3)	h										濃						
	n			濃													
	o			激													
	f																○

○あるいは文字：交替のプラスの項の存在するところ

「語幹」は終声を指し、その他は初声を指す.

口：口音 鼻：鼻音 流：流音 V:i以外の母音

濃：濃音化 激：激音化 鼻：鼻音化 蓋：口蓋化 ㄴ：ㄴ化 ㄷ：ㄷ化  
ゴチックは漢字語にのみ現れる。名詞類のその他には固有語や漢字語が現れ得る。

(f) 以上述べたことの一端を大雑把に歴史をも視野に入れて分かる限りで述べてみよう。ここで中期語というのは15世紀語のことである。

現代語はまさに言語史の集積の結果であり、当然時代を異にするさまざまな要素が入り込んでいるが、それがまた現代的な解釈を施されてなんらかの体系を成し、未来に受け継がれて行くものと思われる。

さらに朝鮮語のように形態音素論的に複雑な言語ではそれに絡んで正書法のさまざまな問題が提起される。

人は得てして例えば {먹자} [먹자], {먹으면} [머그먼], {먹어} [머거] においてしばしば {먹+으} から [머그], {먹+어} から [머거] が生じたかのように錯覚するが、あくまでも {먹-} [먹-], [머그-], [머거] から形態素 /먹-/、/으-/、/어-/ が抽出され、正書法に固定されたにすぎない<sup>8</sup>。したがって朝鮮総督府の正書法（これは多く朴勝彬のものとも一致する）も音素表記という観点からは一理はあるのである。現行正書法の {먹으}[머그], {먹어}[머거] はアンシエヌマンには当たらない。それはあくまでも自立語どうしの結合において生じるものだからである。

しかもこの周時経式の表記は用言の活用の体系を念頭に置いたものであるから、それなりに理解できる。活用の体系からはみ出るものは形態音素論的の適用を受けない。{바다} [박따], {바아} [발가], しかし {발깁다}, {벌깁다}, {불다}, しかし {불그레하다}, {불그스름하다}. 同じように {결} [결], {결에} [겨테], しかし {겨드랑이}; {짚} [집], {짚이} [지피], しかし {지푸라기}; {홀다} [홀따], {홀어지다} [흐터지다], しかし {흐트러지다}. そのような理由から次のような形が正書法で決められたことは理解可能である：{자빠지다}, {자빠뜨리다} の前半部 {자빠} は動詞語幹の特定ができないために（またそれが単独に用いられないために）発音通りに書く。{기쁘다} と {기깽다} は現代語では中期語 ㅈ- との関係が感じられないために、{아프다} も {알다} との関係が薄く、{아끼다}, {아깝다} も語根の抽出が困難であり、{엿보다}, {엿듣다} の {엿-} は中期語 /열-/ に由来するが、現代語にそれがないので、{엿} のように音素交替を起こさない末尾形 ㅅ が書かれるのである。

ところで現行正書法にはさまざまな問題がある。よく知られているところでは {이튿날} [이튿날] は {이틀} との関係において終声 {ㄷ} が書かれたらしいが、そのような交替は中期語や現代語を通してあったことがなく, 이튿날 と書かれるべきだという意見が強い。[넉쩍] は {넉다} との関係において {넉적}



と書かれたらしいが, {넉다} は普通 [넉따] と読まれ, しかも {납작} の場合は {ㄷ} なしに書かれる. 韓国で {벗} は {버찌} を根拠にその終声字が決定されたようだが, それが {벗꽃} 以外に単独に用いられることはなく, それならば北朝鮮のように {벗} と書く方が論理的である. {값} [갑], {값은} [갑은] ~ [가븐] までは理解できるとして, どうして [가버찌] は {값어찌} と表記されるのか? {말} の終声字は {말이} [마지] によって決められたようだが ({말아들} [마다들], {말형} [마텅](一兄)), どうして単独で用いられることもなく, まして曲用もしない形態素を {맏} と表記できないのか?

したがって本稿の別表の「文字」欄のハングルによる終声字は実はこのような形態音素論的交替に関するものである.

{앞앞이} [아바피], {날날이} [난나치] の例は興味深い. これは「名詞(終声あり)+名詞(終声あり)+接尾辞(母音 i で始まる)」という構造を持つが, 2 つの名詞の間の終声と名詞と接尾辞の間の終声との音素論的あらわれの違いに着目せよ. 接尾辞は語尾と同じ扱いだが, {앞앞-} では {날알} [나달] や {홀웃} [호둔] と同様にいわゆるアンシエヌマンと同じ扱いとなっている. ついでながら {홀웃} [호둔] の接頭辞的な形態素 ({홀이불} [혼니불] ([호디불] も) を参照せよ) の終声は {홀으로} [호트로] によって決まったものらしい. 現代朝鮮語において接頭辞と認定されるものの大部分が名詞由来であること, また連体詞と接頭辞の違いも明瞭でないことを参照せよ: {첫아들} [처다들], {첫인사} [처딘사] ~ [천닌사](一人事). 接頭辞+語幹の間での音素論的あらわれは名詞+名詞の場合と同じである ({갓아흔} [가다은] も参照). 中期語の {바티} が後に {바치} のように口蓋化したと思われるが (上の {날날이} [난나치] 及び {갈이} [가치], {달히다} [다치다] 参照), これは朝鮮総督府の正書法 {낫낫치}, {갓치}, {닷치다} によく現れている. つまり口蓋化は語幹+語尾あるいは接尾辞 (i で始まる) でのみ起こるのである. {말형} [마텅](一兄) は「名詞(接頭辞)+名詞」のケースであり, 口蓋化しないのである. {맏/맏-있다} [마/머-딛따] ~ [만/먼-넉따] も同じケースであるが, この場合は [마/머-싹따] もあり, これは [마/머-시읏따] が縮まったものと思われる. {날날이} [난나치] の後半の例が接尾辞に関するものだとするならば, {말은} [바튼] ~ {바슨}, {말이} [바치] ~ [바시]; {밤낮이} [밤나지] ~ [밤나시] はすべて「語尾」に関するもので, 前者が書き言葉に属することが多いなら, 後者が話し言葉に属するものである. かつて韓国では {포켓} {포켓은} {포켓이} のように書いたこともあったが, 現在は {포켓은} [포케슨], {포켓이} [포케시] である. アンシエヌマンの場合この {ㅍ} は [ㅈ] となることに注意されたい: {포켓 안} [포케단]. 人工的に作った単語 {히웅} [히은] は例えば {히웅이} [히으시] にしかなりようがないの

である<sup>9</sup>。この書き言葉と話し言葉の対立は他の系列でも起きた：{부엌에} [부어케]~[부어게]。多分この過程は現在でも進行中であり，このことは名詞の語尾が助詞化する過程にあることをうかがわせる。かつて韓国のバス停留所は「{학교앞}(学校—)」という名のものがいたるところにあり，バスの車掌は多く「{학교앞이에요}」と言うべきところを「하교아비예요」と言ったものである。多くの韓国人はそれは車掌が疲れて発音がつらい激音を避けるのだと説明したものだが，筆者はそれは一種の話し言葉形ではないかと思っている。名詞の曲用における話し言葉形は /ㄱ/ 終声を除いてアンシエヌマンの様相に近づきつつあると言える。

{맏형} [마텃] (一兄) に類するものとして {맏형정} [마텃정] があるが，これの第 1 要素は用言語根である。朝鮮語は他のアルタイ系諸言語とは異なり用言語根がいきなり名詞の前に来ることがある。接頭辞の{첫} も本来動詞語根だった可能性がある。처음<첫- 参照。

恐らく「n の挿入」は終声 /ㄱ/ 形態素（恐らくは一種の属格的意味）の鼻音化に由来するものと思われ，例えば合成語 {아랫니} は中期朝鮮語のある時期から現代語に到るまで発音は変わらなかったが，他方 {니} は語頭のㄴが消えて 이 となったので，あたかもここに /n/ が添加されたかに見えるに至った（リエゾンの発生）。{업시녀기다} は，{녀기다} が [여기다] と変わったために，업신+여기다のように解釈し直され，さらにリエゾンを起こして [업씬녀기다] となったものである（綴りは {업신여기다}）。しかし固有語では多くの場合アンシエヌマンとリエゾンの併用が行われる：{밭일} [바딜]~[반닐]。漢字語では {조선일보} [조서닐보] (朝鮮日報)。ただし {첫인상} [처딘상]~[천닌상] (一印象)。なお北朝鮮でリエゾンを「切音」と呼ぶのは /n/ の前で一旦途切れれるという意識があることと結びついているものと思われ，興味をそそる。さらに筆者の経験を述べれば，韓国の学生がハングル書きの英語を発音するというよりはハングルをそのまま読む際（いわば日本の学生がカタカナ英語を読むように）[너도운니버들소우]と言った時に，これが 녀도운리벗을소우 (not only but also) だということが分かるようになるのに時間がかかったことを吐露する。下線部を見てわかるように，ここでは英語の単語の境界はアンシエヌマンが現れ，오운리 (only) でも「c 化」の現象が現れていることに注意されたい。筆者が韓国留学時ソウルで聞いた MRA (=Moral Rearmament 道德再武装=アメリカの反共団体) は [에마레이] だったが（単なるアンシエヌマン），慶尚北道で聞いたそれは [엠말레이] だった。すなわち慶尚道ではアンシエヌマンの位置に「子音の反復」（恐らくは m, n, r だけ）が現れるのである。

とりあえず特に現代朝鮮語のアンシエヌマンとリエゾンに焦点を当てて考察してみたが，御叱正を賜りたい。



## 【注】

- 1 本稿は韓国の正書法によるものとする。当初韓国と北朝鮮の正書法を考慮した表の作成を考えたが、それが特に筆者の呼ぶリエゾンといわゆる「사이시옷」に関して無理なことを悟り、断念した。しかし時折正書法には触れるであろう。
- 2 初声と終声の位置におけるㄱ, ㄷ, ㄴの音声的実現はかなり異なるが、朝鮮人の言語意識によりそれらを同一の音素と認定する。
- 3 鼻音ㅇは音声的には初声の位置にあらわれるようにも見えるが、朝鮮人の言語意識によって常に終声であると認定する。
- 4 実際に{밝다} [봰따] <明るい>, {맑스} [맑쓰] <マルクス> (北朝鮮の綴り) という発音を筆者は聞いたことがある。恐らくは音素表記を基調とする朝鮮総督府の正書法でもこれらの終声字が用いられているのはこの事実と関係あるものと思われる。現代朝鮮語で終声の位置に単独で立ち得る 2 つの子音はこの 3 つのみと思われる。
- 5 例えば{있습니다} [이쌔니다] の場合 [ㅄ] が長く発音されることが観察されるが、朝鮮人の意識によってこれはㄷ+ㅄと認められる。閉鎖音ㄷが摩擦音ㅄの前で摩擦化したものである。つまり{있습니다}は [읷쌔니다] と [이쌔니다] の双方の形を持ち得る。両者 (同一の語形) は異なる音素構成から成ると言うべきである。
- 6 例えば次の場合に 2 種類の発音が可能である。① {집보다} [집뽀다], [지뽀다]; {굳다} [굳따], [구따]; {갈지} [갈찌], [가찌]; {있다} [읷따], [이따]; 낮다 [낱따], [나따]; {막고} [막꼬], [마꼬]; {깎고} [각꼬], [까꼬]; {박에} [박게], [바게]; ② {깊은} [깁픈], [기픈]; {짙은} [집픈], [지픈]; {질은} [질튼], [지튼]; {끝이} [끝치], [꼬치]; {꽃이} [꼇치], [꼬치]; {맞힌다} [맏친다], [마친다]; {익힌다} [읷킨다], [이킨다]; {동넌에} [동넌게], [동녀게]。①②ともに各々前者はゆっくりした発音、後者は普通の速度の発音の違いと言える。これらは朝鮮人は発音し分け、かつ聞き分けるから、異なる音素構成から成ると言うべきである。前者は北朝鮮の正音法で採用されているもののようである。さらに{집보다} [집뽀다] も {짓보다} [질뽀다] もともに [지뽀다] と発音され得るし、{막고} [막꼬] も {말고} [맏꼬] もともに [마꼬] 発音され得るから、両者{집보다} [집뽀다] / {짓보다} [질뽀다] も {막고} [막꼬] / {말고} [맏꼬] もともに同音異義語 [지뽀다], [마꼬] を成し得ると言える。しかも朝鮮人の報告によれば, {오빠} [옹빠], [온빠]; {아까} [악까], [알까]; {조카} [족카], [존카]; {아프다} [압프다], [알프다] の発音も許容されるとのことである。筆者は例えば{따뜻하다} [맏뜯타다], [따뜨타다] を朝鮮総督府の正書法で뜨뜻하다と書き, {아까} [아까], [악까], [알까] を

{앗가}と書いたのもこの報告による現象と無関係ではないと見る。

- 7 例えば次の場合に 2 種類の発音が可能であるが、前者はゆっくりした発音、後者（最後の例では第 3 のものも）は普通速の発音の違いと言える。  
{잠깐만} [잠깐만], [장잠만]; {안방} [안팡], [암팡]; {안고} [안꼬], [앙꼬]; {입고} [입꼬], [익꼬], [이꼬].
- 8 例えば [웁는다], [울쁘면], [울맘따] から /웁-/ という形態素を抽出し、その末音を ㅍ とするとしても、それは /ㅍ/ ~ /ㅍㅍ/ という形態素の末音の交替（いわば形態音素論的交替とでも呼ぶべき）を記号化しただけであって、それ自体は決して「音素」ではない。なぜならば /ㅍㅍ/ という音素的実体がないからである。たしかに 形態素 /ㅍㅍ-/ における末音 /ㅍ/ は多くの場合音素を成すが、[명는다] を {ㅍ는다} と表記する時は、末音 ㅍ は音素交替 /ㅍ ~ ㅇ/ の代表でしかない。
- 9 現代語で「雄/雌」は {수컷}/{암컷} と言う。中期語には슴/암이라는名詞があった（具体的にこういう形はなかったが、形態音素論的にそう復元し得る）。これは次の平音を激音化させた（ただし単独にあらわれる時は終声ㅁを発音しなかった）。現代語ではこの {슴}, {암} は今でも健在で、次のように造語さえ可能である。{수호랭이} [수토랭이], {암호랭이} [암호랭이]; {수여우} [순녀우], {암여우} [암녀우]（後者はリエゾンがかぶさった）。それにもかかわらず現代語では名詞では終声ㅁを末音とする名詞は基本的にはなくなったといつてよい（하나토は方言形か？ <ㅎ낭+도>）。
- 補 1 数詞に例外があるが（{아홉}, {아흔}, {아흐레}）, 実際には [아웁], [아은], [아으레] と発音される（もっとも現在では literary reading もある）。ほかに {사흘}, {나흘}, {마흔} があり, {일흔} は [이른] と発音される。{안해}（北朝鮮また中期朝鮮語も）は韓国では {아내} と表記される。

## 参考文献

- 菅野裕臣(1965)「現代朝鮮語のリエゾンについて」,『朝鮮学報』36, 天理：朝鮮学会。
- 菅野裕臣(2006)「朝鮮語の音と文字」,『韓国語学年報』2, 千葉：神田外国語大学韓国語学会。
- 菅野裕臣(2007)「文字, 音, 正書法」,『韓国語学年報』3, 千葉：神田外国語大学韓国語学会。
- 菅野裕臣他(1988)『コスモス朝和辞典』, 東京：白水社。
- 辻野裕紀(2014)「現代朝鮮語の〈n 挿入〉に関する一考察—発生論と機能論—」,『韓国朝鮮文化研究』第 13 号, 東京：東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究室。